

講演者紹介

最初に自己紹介をさせていただきます。フィリピンへは2010年に当時東京で勤めていたアメリカの銀行のシティバンクの転勤で来たのがきっかけです。

アメリカの大学を卒業後に、日本へ帰国してシティバンクに入社して、最初はテレマーケティング、支店と営業を学ぶのが新卒社員の強制コースだったので、電話や支店で金融商品販売や、銀行サービスのサポートをしました。

入社2年後は自分の好きな部署に異動が許されるので、3年目に大学で専攻した会計の知識がどのくらい使えるのか試したいと思いファイナンスの部署へ異動しました。担当はFP&A、ファイナンシャルプランニングアンドアナリシスで、マネージメントリポーティングや、バジェットのプランなどを主に担当していました。リポーティングの際のファイナンシャルのブッキング、アジャストメントなどは当時すでにマニラで部分的に行われていましたが、2008年の金融危機によって、高い日本人の人件費を削減するために、さらなるフィリピンへのオペレーションの移管が行われ、あまりの量、スピード、日本特有の組織編成や、プロダクトの複雑さから、マニラでエラーが続出となり、それを修復するために「日本から誰かをマニラに送る」というタスクを達成するために一人でマニラに送られてきました。当時、同じようなイニシアチブが他の国でも起こっていて、私とほぼ同時期に、韓国、タイ、インドからマニラへアサインされているスタッフがいました。マニラは日本のみならず、アジア諸国全般を見るハブなので、トランザクションのブッキングやアジャストメントプロセス、アジア地域でのレポーティングのスタンダード化など、さらにマニラ内でも、オンショアからタスクを受けた後の効率化を行うような仕事をしていました。

マイグレーションの後もプロセスの効率化を図るプロジェクトがエンドレスに続き、なんだかんだで4年目になっていた時に、フィリピン人の夫と出会い、とんとん拍子で結婚となりました。日本の、私を送ってくれたマネージメントには「当面日本には戻らないと思います」ということを報告し、フィリピンのマネージメントには「結婚したのでしばらくフィリピンに残るから違う部署に異動して違う仕事をしたい」と相談し、レギュラトリリポーティングの部署へ移りました。そこではFRBやOCCなど、アメリカの規制当局に提出するシティバンクグローバル全体のレポートの内部監査から、ミスリポーティングの原因分析、その問題解決までを、フロリダ・タンパ、インド、コスタリカ、ポーランドのワルシャワなどのそれぞれの地域のハブを主に、NY、ロンドン、東京、香港、シンガポール、ブラジル、ロシア、など、様々な国のフロントビジネスから、ファイナンスのバックオフィスなどたくさんの部署の人達と仕事をしてきました。また、部署内では監査の仕事や、オフショアのオペレーションのバックグラウンド出身が多く、オンショアでフロントのバックグラウンドを持ったスタッフが少なかったため、トレーニングをプラン、ファシリテートしたり、フィリピンでは外国人スタッフとして勤務し、他のスタッフと違う視点があることから、グローバルチームでフィリピン以外でもインドやコスタリカのチームを持ったり、過去に何人もフィリピン人が匙を投げたコスタリカのスタッフなをアサインされたりと、キャリアディベロプメントなどにも取り組んできました。

2019年3月に双子の息子が生まれ、二人が一才になったと同時にコロナになり、双子育児奮闘中の私にはありがたいWFH100%となり、ずっと双子を育てながらでもなんとかフルタイムでシティでキャリアを築くことが出来ました。2022年第二四半期からは週一でオフィス復帰が始まり、その後、週2、週3と徐々に頻度が増え、通勤や、その他にも久しぶりに会社でみんなに会うので、その都度ランチ、コーヒーと仕事以外の時間をたくさん要し、出産前は全く問題なかったですが、双子の育児との掛け持ちのフルタイムで、少しでも子供と過ごせる時間を絞り出したいところを、会社に行くたびにたくさんの時間をロスするので、時間と、働く場所に融通が効く仕事がいい、また、以前からいづれは独立したいという思いがあった事から、去年の2月末に19年勤務したシティを辞めました。

私は千葉で生まれ育ったのですが、父親が沖永良部出身で、父の兄弟がみな千葉に上京していて、みんなフィリピン人のようなノリの人たちで、しかもフィリピン人ファミリーのように熱い結束力のあるファミリーで育ちました。

現在は、自分が留学生だったこともあり、また卒業後も外資系企業勤務や、海外勤務で全部英語で仕事をしたり、フィリピン人の夫や会社もフィリピンに浸かった生活を送ってきたのもあり、フィリピンの英語留学のビジネスを行ったりしながら、フィリピン在住の日本人の方々がどのようなビジネスをされているのかなども勉強したくて、このビジネスサポートセンターのセミナーに去年から参加させていただいていました。そこでご縁を頂いて、現在BSCにて営業担当の役割を頂き、本日登壇もさせて頂いております。

フィリピンとの出会いのキッカケ

真剣に文化、歴史、政治・経済、宗教などを一日中ディベート

まず、私がフィリピンとどういう接点を持っているのかを、今日のスライドをお話するために触れさせて頂きたいと思います。フィリピンに最初に来たのは高校3年生の時で、私の人生最初の海外でした。当時日本に通っていた英会話学校のYMCAが、マニラのYMCAと姉妹校で、毎年行われるエクステンジプログラムに参加したのがキッカケでした。日本から5人の生徒が、トータルで2週間、それぞれアサインされたマニラYMCA側の生徒のお家にホームステイと、その間の3日間は、現地生徒100人程度と一緒にバスでバギオまで行って合宿し、日中は文化、歴史、政治、経済、宗教など多岐にわたるトピックでディベートを行い、最終日には、ディベートのチームで一つずつ出し物をし、フィリピンチームがダンス、日本チームは浴衣を着て巨大福笑いを披露したりして、とても濃い2週間でフィリピン人の考え方や、生活がとてもよくわかる経験でした。

その後、社会人になってマニラ転勤となり、現在のフィリピン生活に至っています。結婚して双子の息子達が生まれてからは常時3人、去年からは息子達も大きくなったので、二人、いつも夫の田舎のイラガンというマニラから車で10時間北の地方からお手伝いさんが家に住み込みで一緒に生活をしています。

フィリピン人を理解する: 人間関係

朝イチに会った瞬間に笑顔で "GOOD MORNING KAYO!!!

皆さんも街中で朝歩いている時にガードさんなど知らない人から至るところで「グッドモーニング、サー」と言われるのではと思いますが、フィリピン人はしっかりと、大きな声で挨拶をします。毎日遠い通勤で疲れていてもみんな満面の笑みで挨拶をして1日を始めます。仕事などで大事な人間関係を築くためにも挨拶が基本であり重要な事を理解しているのかと思います。

私の中学校が挨拶は人間関係の基礎だということでも挨拶に力を入れている学校で、廊下で先生とすれ違う時には必ず「おはようございます」、「こんにちは」の挨拶をすることを徹底していました。それがこのようにどこでも自然に出来ているフィリピン人は人間関係を大切にしているからなのではと思います。先日も朝ビレッジ内をジョギングしていたら、見知らぬおじさんがすれ違い間際に「Good morning!」と声をかけてくれました。暑いのでなかなか走っている時に挨拶をこちらからする事はなかったので、これからは自分から挨拶できるようにしようと思ったところでした。

フィリピン人の同僚、上司、部下とのSNSは必須

フィリピンは世界一携帯電話を見ている時間が長い国です。Digital 2023: Global Overview Reportは約50カ国の平均画面時間について研究を行い、携帯電話の使用時間は1位、コンピューターの平均画面時間は8位、SNSの時間は3位で、1日の5分の1以上をSNSで過ごしています。フィリピン人は「人」に興味・関心がとてもあります。なので、SNSで自分がポストするのも日本人に比較して頻繁ですし、もちろん他の人の投稿もたくさん見ます。なので、フィリピン人とはSNSにて友達になるのは人間関係を構築する上で必須と言って良いと思います。どんどんグループ写真を撮り、自分のページに投稿して、タグ付けしてくれます。日本人だと、他の人が写っている写真を投稿する前は許可を取ったり、ましてタグ付けはあまりないと思います。フィリピンだと、タグ付けして欲しいので、タグ付けしないと冗談で怒られるか、積極的に人のページの投稿に自分からタグ付けしたりします。

アウトイング(OUT-ing/チームビルディング)はとっても大事

フィリピンにはOUTにINGをつけたアウトイングと言われるチームビルディングのアクティビティがあります。これも、フィリピン人は人間関係を重んじるところから、とても大事な行事で、むしろいくら仕事の作業ができて、アウトイングに参加しない、人間関係を尊重しない人は評価が下がるほどOUTINGは大切です。仕事がどんなに大変な時も、ここで人間関係の基盤がしっかりとできていると、後で難易度が高かったり煩雑な仕事をアサインしたりする際にもコミュニケーションがスムーズにいき、しっかりと仕事をしてくれます。

職場の仲間は家族のように付き合う事が多いフィリピンでは、OUTINGは往々にして週末に行われる事も多いです。平日くたくたになるまで仕事をして、週末も仕事の仲間と一緒に過ごしている休めるのか、と思いたくなくても、このOUTINGに参加する事で、将来の平日の仕事のパフォーマンスが向上します。また、フィリピン人にとっては、本当に「職場の仲間は家族」という感覚があるので、ほとんどの人はダルがることはなく、喜んでアウトイングに参加して楽しい仲間とのひと時を過ごしています

何時も"MOMENT"である

フィリピン人は「今」の何気ない当たり前の幸せに日々感謝をしています。なので、日常のたわいのない事、私たち日本人だと素通りしてしまうような事でもとても大切にします。日本人だと素通りしてしまうような平凡な時間でさえも、大事に思い出として納めたいという想いから写真をとっても頻繁に撮ります。例えば、平日の会社で午後メリエンダでピザをキャンティーンで食べる時も、まず食べ始める前にピザと一緒に写真を取ります。

また、特に「ピザをみんなと一緒に食べる」などのアクティビティでなくても、毎日を「生きる」フィリピン人なので、「今？」ってというような状況でもすかさずセルフイーで納めます。みなさんもモールや街中で遭遇されているかと思いますが、特別何もない場所でもばっちりキメた笑顔で写真を撮ります。それはまさに、「常にモーメント」だからなのかと思います。

フィリピン人を理解する: 貧富の差

お金持ちの人が奢るのが当たり前

フィリピンの貧富の差は現在でも日常的に存在します。また、その貧富の差は大富豪とホームレスなどという大きな格差のみならず、同じ会社に勤めている人たちの中でも顕著に存在します。また、フィリピン人同士でもそれはすでに認知をされていて、「あの子は裕福な家の子だから」などと

という言葉も結構耳にします。日本だと自分の方がお給料が高いからとか、貯金がいっぱいあるからって友人に奢ってあげたりはしないと思いますが、フィリピンでは裕福な家の人がそうでない一般家庭の人に食事やスタバを奢ったりというのは日常的にあります。

ただ、近年フィリピン人の経済力が上がっていて、私がフィリピンに着任した当初の14年前などと比べると、この貧富の差の顕著感も少しやわらいだように感じることがあります。具体例をお話すると、私が来たばかりの時に毎日会社の向かいにあるスタバでコーヒーを買ってデスクで飲んでると、周りは誰も飲んでないことに気がつきます。100人以上いる部署のフロアで本当に1人か二人しかスタバを飲んでいないのです。この時に「あの子はお金持ちの家の子だから」となったのです。そして、「かよは日本人だから」となりました。

ですが、ここ数年では、会社のみならず午後「スタバ行こう」と普通にスタバを買えるようになって、「フィリピンのみならずの経済力が上がってる」と感じます。少し話がそれますが、フィリピンの経済力が上がってるのを感じるもう一つの例として、外食率が上がっている、また、フィリピン人の食べ残しが多い時です。そもそも外食はお金がかかるので、そんなに頻繁ではなかったですが、みんなが外で食事をする機会は増えているし、オーダーもたくさんして、大量に残して平気で帰るのを見ると日本人の私は「もったいない」と思ったりするものですが、フィリピン人は「節約の為に、食べる分だけオーダーしよう」という感覚はあまりないようです。

話を戻しますが、フィリピンでは基督教の教えから、「困ってる人は助ける」精神なので、お金に余裕がある人が、そうでない人に奢ってあげるなどがあります。そして、奢ってもらう側もある意味これがフィリピン文化なので、日本人ほど「遠慮」をするようなこともありません。

宵越しの金は持たない

そもそも、フィリピン人は、お金を貯金するという事が慣習的になく、あればあるだけ使ってしまう。一流企業のコーポレートワールドの人たちでも、お給料日は朝から「今日はお給料日だね」という会話になり、毎回必ず銀行口座に入金されたかを朝、業務を始める前に確認したり、お給料日はお祝いでランチアウトに出かけたりします。そのくらいお給料は毎回全部使い切ってしまうので、次のお給料日が待ち遠しいのです。

一般的に中国人系フィリピン人はお金持ちの場合が多い

パッと見て肌の色、顔立ちが中国人ぽい、中国の苗字などのフィリピン人は大概お金持ちの場合が多いです。彼らは家の中でも中国語で話し、中国系の学校や教会に通ったりと、独自のコミュニティがあります。中国系フィリピン人はチャイニーズである事に誇りを持っているので、結婚なども相手の家がチャイニーズな事を好みます。すごい場合だと、中国人ファミリーの娘が職場で同じ部署のフィリピン人の家のボーイフレンドができて、娘の上司である母親がボーイフレンドを他部署へ異動させたとう実話もあります。これを聞くとその母親は冷酷と思われるかもしれませんが、そのくらいチャイニーズ系フィリピン人はチャイニーズ系フィリピン人と付き合いがります。

余談までにその娘とボーイフレンドの結果ですが、その二人は両親にも認められ、現在は結婚して両親も含めたファミリーで日本や海外へ旅行したりととても円満に過ごしています。現在では昔に比べたら少しその「チャイニーズフィリピーノ同士でなきゃ結婚は許されない」風習も薄らいでいるのかもしれませんが。

フォーブスの「フィリピンでリッチな人ベスト50」を調べてみました。トップ10のうちの半分の5人が中国系の苗字となりました。

職場の友人でもお金を借りたいと持ちかけられる事がある

同じ職場に勤めるような、ある程度同じ教養レベルのフィリピン人同士でも、家族が入院した、急死したなど緊急の際にはお金の貸し借りをする事がオープンに行われます。Facebookで募金を募ったりも頻繁に行われます。また、困ってる人を助けるのが当たり前の精神が強いので、みなそういう状況の場合は募金をしてお互い金銭的なトラブルも助け合います。困ってない、もしくは頼まれてない場合でも、チームが一丸となって自主的に出産や、家族の不幸で明らかにしつて出費がかさむシチュエーションは、募金活動が行われて、集金して、当人に送金します。私も2回ほどフィリピン人の同僚に個人的に相談された事があり、返って来なくてもいい金額に留めて貸した経験があります。もちろん返ってきませんでした。ただ、フィリピン人にとってはあまり驚く事でもなく、当たり前の慣習であるので、私たち日本人もそのような状況になった場合は自己判断で差し支えない金額で対応するのがフィリピン文化にならうには望ましいのかもしれない。

参考までに私が働いていたシティバンクフィリピンのAVPレベルの年収が1~1.5M、ドメスティックバンクのBDOだと同じAVPレベルで0.8~1.2Mで、シティは1.25倍もらっていて、フィリピン人の平均収入は319~400Kなので、平均の3倍近くもらっている事になります。彼らの出身校は "Big Four" のアテネオ、UP (University of the Philippines)、ラサール、UST (University of Santo Tomas) が8割以上を占めていて、UPの人は国で一番の学校出身 (e.g., 東大) のプライドがあり、仕事内容も他の人は言われたことは当たり前のようにはやりますが、UP出身者は、どの仕事をするか選ぶ傾向があります。チャイニーズフィリピーノの割合は1割程度で、チャイニーズフィリピーノ同士はお互い仕事をするときも信頼しあう場合が多いです。チャイニーズ系の人たちは、平均的に勤勉なファミリーで育てている傾向があり、仕事においてもプライドを持って取り組み、粘り強く、途中で投げ出す事も少ないです。

フィリピン人を理解する: フィリピン人にとって大切なこと

仮病の病欠は暗黙の了解でOKである

日本では人の目を気にしてあまりやる人はいないと思いますが、フィリピン人は堂々と仮病で病欠をします。「年にSickleaveが14日まで」などと給与の中に折り込まれている場合などは特に、消化しないのは勿体無いという考えが根底にあります。ひどい場合だと、実際にあったのは、仕事を休んでる人がその日カラオケに行っその写真をFBにポストしてもちろん上司もFBで友達なのでそれを見ている、などです。そしてさらに日本人にとって驚きなのは、それでもある程度フィリピン人上司は折込済であまり怒らず、特に問題にならないのです。なぜなら、それはその上司のフィリピン人自身も仮病でSickleaveを取るからなのです。若いジュニアスタッフのみでなく、シニアでPeople Managerであっても、たくさん病欠をします。そしてそれもまた、ジュニアスタッフに薄々勤付かれています。

ただ、仮病で休む場合も、一応大事な仕事は終わらせておくとか、重要なミーティングやトレーニングなどのイベントごとがなくて、休んでもさほどインパクトがない日を選ぶという配慮をみんなするので、容量よくやっているという事と、さらには、仮病でシックリーブを取る人は計画性があり、長い目でみると仕事の全体のパフォーマンスが高い傾向があります。上手に息抜きをして長距離を健全に走っていて良いのかもしれない。

フィリピン人にとって家族は何よりも重要

フィリピン人はとても家族を大切にします。日本だと仕事にプライベートが重なると、会社に気を遣って会社を優先する人が多いと思います。病欠を堂々と取るのと少し重複しますが、フィリピン人にとって一番大事なのは家族なので、家族に病気、事故、怪我など何かがあった場合はもちろんですが、誕生日、家族イベントなどでも迷いなく家族を優先します。会社の忘年会などで珍しくせっかくチームが全員集合してるような時でも、一人いないと思ったら「お父さんの誕生日だから」という理由で欠席している人がいたりします。なので、フィリピン人と働く場合などは、家族絡みの理由は寛容に対応することが理想的です。また、日本人感覚で家族を犠牲にして働いている場合もびっくりされるので、自分もフィリピン感覚で、家族の行事や緊急時などにはオープンに事情を話して理解してもらおう事もフィリピン人と働く上では大切なのではないかと思います。

食事への執着心が強い

フィリピン人は食べるのが大好きです。腹が減っては戦ができぬそのもので、何を始める前でも「let's eat」と言ってとりあえず作業を始めるのではなく、食べます。また、時間にルーズなフィリピン人も、食べ物が絡む約束で、ランチアウト、メリエンダなどは時間前からスタンバっています。「みんないつも遅刻してくるから」、とちょっと遅れた私が唯一の遅刻者でみんながテーブルで私を待っていたという痛いめにあった事もあります。なので、どんなに作業が切羽詰まっても、みんなが食べている場合はそれを妨げるような事はタブーです。

また、食べ物の執着心が強いので、食べ物の差し入れはとっても喜ばれます。コツは質より量、頻度です。私は以前大概いつも長時間労働のオペレーションをする部署にいて、みんないつも「お腹減った、お腹減った」と言いながら、なかなか食事に抜けるタイミングが掴めずにハマって仕事をしているようなチームだったので、毎朝通勤時に通りがけのマーキュリードラッグで予算500ペソで、しょっぱい系でチップス、甘い系でクッキー、あとはチョコやクラッカーなどを買って、デスクの脇にみんなが食べられるように置いておきました。しばらく続けると、みんなも期待しているので、ある意味辞められないプレッシャーになりましたが、「Kayo's feeding program」と言って、デパートメントヘッドも聞きつけてわざわざ食べに来てくれたりと、みんないつもあてにして食べに来てくれ、また、そこでのたわいもない世間話で家族やらの話をしてリレーションができて作業もやりやすくなったりという予期していなかった効果もありました。フィリピン人ならみんな食べることが好きなのでなんかしらの時には食べ物を差し入れなどするとウケがいいこと間違いありません。

また、これは余談ですが、昔、マカティの古いオフィスからアップタウンの新しいオフィスに引っ越した際に、衛生面のルールから、新しいオフィスは「デスクで食べ物は禁止です」という説明を引越しプロジェクトを担当しているスタッフからフロア全体に説明があった際に、みんなが不満顔のところを真顔で「じゃあスカイフレイクは？」と聞いた人がいて「食べ物ダメって言ってるじゃん」と私は思うのですが、周りのみんなも「そうだ、そうだ、スカイフレイクはどうなんだ」ってなっていて「え？スカイフレイクは食べ物じゃないってこと？」となったことがあります。結論としてはもちろん却下だったのですが、フィリピン人がカバンに潜ませていて、小腹が空いた時にいつも食べるスカイフレイクはもはや食べ物ではない認識な事を学びました。

日本同様会社飲みは金曜夜が多い

家族を大切に作る背景から繋がって、仕事関係の外での食事や飲み会は金曜の夜を好みます。土日は家族との時間を大切に作るからです。また、マニラ近郊勤務の人で週末は車で2時間程度の実家に帰るとい生活をしている人も多く、彼らは金曜の夜か土曜の朝に実家へ帰り、月曜の朝の出勤時まで週末を自宅で過ごすので、イベントごとは、金曜となります。ただ、日本人ほどと

いかほとんど「飲みの付き合い」の文化はないので、頻度も少なければ、付き合いで参加しなければならぬような風習も全く無いので、行きたい人だけ行く気楽さがあります。

また、もう一つこれに関してハイライトする点は、みんな社会人になっても週末は家族と過ごす人が多いです。日本だと、たまにしか実家に帰らない、親や兄弟にも毎週末会ったりはしない事が多いと思いますが、フィリピンでは平日はマニラで別居などの場合も実家が通える距離の場合は週末帰って家族と一緒に過ごすほど、家族の仲が良いのです。

フィリピン人を理解する: スキル

ゲイの男性は仕事ができる

フィリピンではみなオープンな風習でゲイの本人たちもとても前向きなので私も差別的な観点はなしにフランクに事実としてお伝えさせていただきますが、ゲイの男性は大概みんな仕事ができます。美容やファッションが好きでストイックに筋トレをしたり、美肌のお手入れをしたりする人が多いですが、自分に気を遣える人は人にも気を遣います。観察力が高く、思いやりがあるので、相手の観点に立って痒いところに手が届く、気が利く、きめ細かなサービスを提供できる人がとても多いです。これは一人たまたまとかではなく、何百人とフィリピン人とコンタクトをして、多数のゲイの人と一緒に仕事をしてほとんど必ずと言って良いほどみんな完成度の高い作業、気の利くメールの文章、ユーモアのあるプレゼンなどをするので、ある程度の統計だと思えます。また、トンボーイ(おかま)の人も同様で、とても繊細で気が聞かぬ点から相手の立場に立って物事を進めるので、仕事ができます。

仕事中に歌う人は仕事が早い

丸の内からマニラに転勤して、初めて仕事中にイヤホンして音楽聴きながら歌って作業している人を見た時はびっくりして振り返ってしまいましたが、そばにいた同僚が「日本では仕事しながら歌ってる人いないから驚くよね、フィリピンではみんなやるよ」と教えてくれました。そして、今、長年の経験を経て統計的に思うのが、「仕事しながら歌ってる人は仕事が早い」のです。ストレスを発散してやる気モードなのでしょうか。今私の家にいる20代後半のお手伝いさんが、過去二十人くらいのお手伝いさんたちの中でも最強に仕事をする人で、常に携帯で音楽をかけながら掃除をしたり洗いの物をしたりしています。オフィスではないのでイヤホンではなくスピーカーなんですけど、音のボリュームも過去のお手伝いさんの中でダントツ一番大きいです。ただ、めちゃくちゃ頑張って働いてくれているので、「音少し小さくして」ともいえず、彼女の音楽のテンションに流されてこちらも生活をしています。一番印象に残っているのは、早朝からタイタニックガンガンで熱唱だった時です。

仕事をアサインしたりデリゲートするのが得意

フィリピン人でおそらくみなさまが接点を持つ事になるような人たち、一般家庭に育ち、それなりの教養を受けている人はみなお手伝いさんがいる家庭で育っているため、小さい頃から人に仕事を依頼する環境にあり、仕事を依頼することに慣れていています。日本人のように「お願いするのが申し訳ない」というような心境はないのです。

フィリピンでお手伝いさんを雇うことは、雇用機会を生んでいるという事でいい事として扱われますが、お手伝いさん文化がなく、小学校など物心がついた時から「自分のことは自分でやる」という事を教えられ、給食の配膳や、教室の掃除を生徒自身がやる教育を受けている日本人としては、自分の事を人をお願いするのが悪いことのような気がしてしまい、お手伝いさんを雇う事に躊躇しがちです。

私の場合は、フィリピン人の夫と結婚しても二人で condominium 暮らしだったので、掃除も楽し、全く必要がなかったのですが、双子の息子たちが産まれた時に、産休が3ヶ月しかなく、すぐに子ども達を預けて復職しなくてはならなかったこともあり、お手伝いさんを雇い始めました。当時私の出産をお手伝いしに日本から来てくれていた私の母が、お手伝いさん達にお茶を入れて運んでたら、フィリピン人の夫に「ママ、彼女達はゲストじゃないんだから気を使わなくていいんだよ」と言っていたのが印象的でしたが、それが文化の違いなんだと思います。

なので、フィリピン人で日系企業で仕事をするような人たちや、マネージャークラスでスタッフをハンドルの程度に昇進しているようなフィリピン人は人に仕事を遠慮なく降ろることができるスキルを持っています。

フィリピン人はガッツがある

近年急激にインフラが向上して、生活の便が良くなり、経済的にも豊かになっているフィリピンですが、フィリピン人の生活はまだまだ日常生活も大変な事が多いことが多々あります。日本のように速くて定刻通りで本数の多い電車がなかったのでジプニーを乗り継いで長時間の通勤、道路が混むので朝5時に家を出て運転して会社へ行く、日々の暮らしの家賃、公共料金の支払いもギリギリ、など、日本人の想像を遥かに超えた大変さを日常で経験している場合が多いため、精神的に苦境に強いところがあります。どんな大変な仕事が振られた場合なども、めげる事なく前向きな気持ちで取り組みます。

また、ガッツというか、根性が座っているという面では、フィリピン人は楽観的なので、「なんとかなるだろう」という考えが根底にあります。そうすると、そもそもは大変でない仕事で期限に猶予があるタスクでも、なんとかなるだろうと思い、ギリギリまで手をつけず、最終日にギリギリやっつけのレベルの提出をしつたりします。ガッツもあるし、困難を乗り越えてきているので、何とかするという考えを持っています。

フィリピン人を理解する: スキル

他国の人に比較してもプレゼン能力が高い

フィリピン人は、アメリカやヨーロッパ、アジア諸国、などの他の先進国と比較してもプレゼンテーションのスキルが高いです。小さい頃からの学校教育方針か、教会などの社会活動からか、人前で話す事が得意です。アジア圏でもイングリッシュスピーキングの国として、多くの有名グローバル企業がコールセンターやオペレーション業務をフィリピンで行っていますが、他の英語がネイティブ言語でない国と比較しても英語力も高いので、コミュニケーション能力も高く、プレゼンも聞き取りやすいです。

エンターテイナー精神も高いので、話の抑揚や、テンションの高さもプレゼンに生かされていて、「アナウンサーか！」とツツコミたくなるようなプロフェッショナルな喋り方でプレゼンをする人も少なくありません。

また、グローバルな環境で競う時にもPublic Speakingはとても重要なので、この高いプレゼン能力はフィリピン人の強みと言えると思います。

陽気で歌と踊りが好き

フィリピンは常夏の国なので、みんな陽気な性格で、歌ったり踊ったりが大好きです。職場でのタウンホールミーティングなど大きい集まりなどになると必ず最初にスタッフの歌・踊りの出し物、それもかなり高くオリエターのもの、毎回最初にあります。出演者のスタッフも、業務の合間を縫ってミーティングルームなどで本気の練習をします。私も昔何度か参加させられましたが、みんな慣れているので、ダンスの振付の吸収もとても早く、尊敬しました。今、家の裏にあるArcaSouthというアヤラのプロジェクトの敷地の空き地でも、たくさんの人たちがバレーボール、バトミントン、ジョギング、バイクなどをしていますが、ダンスの練習をしている若者のグループが常に10組以上います。そうやって育てているので、みんなダンスのスキルが平均的に高く、日本人と違って踊れない人がいないです。

ITスキルが高い

英語が話せる、人件費が安い、養育熱心な国である、新しいことにオープンである、経済力の多様性に幅がある、などの理由からフィリピンは以前コンピューターのテストカントリーだった背景が影響しているのか、みなコンピュータースキルが長けています。エクセルのショートカットもキーボードだけで、マウスを使わず目にも止まらぬ速さで使いこなします。また、動画などの編集も普通にプロ並みに軽く成し遂げます。最初に高校生の時にフィリピンに来てYMCAの生徒達と何か作業をしていた時も、当時自分は日本の高校生でコンピューターは触ったこともなかったのに、フィリピン人の同い年くらいの生徒がDOS画面でプログラミングのような作業をしているのを目撃して驚いたのは今でも鮮明に覚えています。フィリピン人は皆ITリテラシーが高いです。

フィリピン人を理解する: 業務面

フィリピン人に仕事を依頼するときは必ず期日を明確に

日本人と仕事をする際はほとんど心配はいらないですが、フィリピンの人たちとお仕事をする場合は必ず期日を明記しましょう。最初は「相手を信頼していないようで悪いかな」なんて思うかもしれませんが、案の定なかなか返ってこずに後で絶対に後悔をして、さらには「期日書いてなかった」と言われて、こちらが頭を下げながらフォローアップをするという、もっと避けたい状況になることになりかねません。また、大きなタスクなどで全体的に時間を要するようなものは、作業を小分けにして、それぞれ期日を設定し、こまめに進捗状況を把握することが大事です。

フォローアップをする際には、口頭ではなく、しっかりとメールなどのドキュメントに残しましょう。口頭だと、向こうも「どうせ他の人にはバレないし」という事でフォローアップも流せてしまいます。なるべく避けたいですが、あまりにも無視され続けて、上にエスカレーションする際にもフォローアップがメールとしてドキュメントされていると証拠として使えます。日本ではこのような心配はそもそも不要ですが、フィリピン人と働く際は肝に当たります。また、ASAPを好きな人はいないですが、フィリピンでは特に嫌われます。

ミーティングミニッツは絶対

日本人は律儀なので言われた事はちゃんと守りますが、フィリピンでミーティングをした際には話し合いの内容をドキュメントに残す必要があります。これはたとえ二人のミーティングでも当てはまります。適当、もしくは自分の都合のいいように解釈されないように、記述に残して、メールなどで参加者にシェアし、何か「違う意見がある」などすれ違いがある場合には指摘してもらうようにする事で、後で「誰が何と云った、私はそうとは捉えていなかった」などの論争にならずにすみます。複数参

加者がいるミーティングなどではミニッツに残すかもしれませんが、フィリピンではこれは二人の場合も必要です。どれだけミーティングでは分かり合えたように進んで、完璧に理解しあえた風に終わったとしても、残念ながらフィリピン人はすぐに忘れがちです。せっかくの果実を失わないためにも、話し合ったことはしっかりとドキュメントして、お互いが後で見返せるようにシェアするのが大事です。

チャットの絵文字は積極的に使おう

なんとなく絵文字を使うと「ふざけてるイメージを持たれるのでは」と真面目な日本人だと思いがちですが、フィリピンなど特にスマホスクリーン時間世界一、SNSも世界3位の国では絵文字はお偉いさんもどんどん活用します。むしろ、この絵文字を選択するセンスもそのマネージャーのコミュニケーションスキルと言えるほどで、トレンドを掴んでうまく活用することでより気持ちや文章の雰囲気をも的確に表現できるツールなのです。また、シャイなフィリピン人の場合は、絵文字がないと、「この人怒ってるのかな」と不安になる場合もありえなくありません。

私も最初にフィリピンに来て仕事のコミュニケーションをしている際に絵文字を使うことにためらいを感じましたが、スマイルを付けて送ってくれた人にはやはりスマイルを付けて返信するなどをした方がマイルドにコミュニケーションが進み、次第に使うことにためらいを感じないようになりました。使ってみると文字で表せない表情なども上手に表すことなどができ、特に人がどう思っているかを気にするフィリピン人とのコミュニケーションには欠かせない大事な要素です。

無謀な計画が多い

フィリピン人は難題が降りかかってもめげないガッツがあると言いましたが、良くも悪くも、やっつけで乗り切ろうとするとところがあります。なので、日本人の感覚だと「明らかに無謀なのは」と思うような計画もたくさん降りかかってきます。確かに不可能ではないのかもしれませんが、ギリギリの期日や、膨大な量の仕事を短期間で終わらせるような無謀な計画を打ち出してくることが多くあります。

フィリピンでは女性が出来る！

「フィリピンでは女性が昇進率が高いのでしょうか？」と前回このフィリピン人のトピックでお話をした時にご質問を頂いたので、今回付け足しました。フィリピンでは女性の進出度が高いです。2023年の最終四半期にアジア、ヨーロッパ、米国の4,891社の50人から2,500人の従業員のミッドサイズの企業に実施されたサーベアーで、

- 43%のフィリピン企業のシニアマネジメントは女性である。
- フィリピン以外では、タイ3位、マレーシア7位、インドネシアが10位で東南アジアからランクインしている。
- フィリピンは常にトップかトップ付近にランクインしており、今回で20年となる。去年は2位、一昨年は4位、2021年と2020年はトップだった。
- 女性が進出している背景としては、早い段階から性別の格差について向き合って対応し、2009年のマグナカルタウィーメンアクトという女性に経済的・社会的権限を保証する運動がある。
- 多くの地方出身で貧しい女性が都市部で働く女性の家事を手伝い支えている。
- 今回調査の対象となった企業の47%がオフィス勤務主体で、去年の36%から上昇した。また、45%がオフィスと自宅のハイブリッドで、53%から減少した。
- オフィス勤務を主体としている企業が唯一、女性のシニアマネジメントの割合が世界的水準を下回った。となっています。出生率は日本が6に対してフィリピンは12と、2倍で女性はたくさんのお産をしながら社会進出もしているということになります。フィリピンの女性は責任感が強く、負けず嫌いでキャリア思考の人が多く、どんなに子沢山でもお手伝いさんを活用して社会との繋がりを継続する場合は殆

どです。会社勤めをしているようなワーキングウーマンの女性が結婚や出産を機に仕事を辞めるケースは全くと言っていいほどありません。根底には、もちろん、「経済的に家族を支えたい」というのもありますが、「社会的に自立した人間でありたい」という考えがあるように感じます。今でも「女性は結婚したら出産して子供の面倒をみる」という考えが根強い日本とは異なるかと思えます。